

【和書・和論文】

【あ】

●青木和富

—— 「(特集・ガーシュイン) “ジャズ・エイジ” のジャズ」、『ユリイカ：詩と批評』(1981年12月号)、東京：青土社、177～183頁。

●秋元英一

—— 『世界大恐慌』東京：講談社学術文庫、2009年。

●秋元秀紀

—— 『ニューヨーク知識人の源流：1930年代の政治文化と文学』東京：彩流社、2001年。

●アーネスト・サトウ

—— 「ヴァージル・トムソン論」、『音楽芸術』(1980年8月号)、東京：音楽之友社。

●有賀夏紀

—— 『アメリカの20世紀(上・下)』東京：中公新書、2002年。

●有賀夏紀、油井大三郎、編

—— 『アメリカの歴史：テーマで読む多文化社会の夢と現実』東京：有斐閣、2003年。

●有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎、編

—— 『アメリカ史研究入門』東京：山川出版社、2009年。

●有賀貞

—— 『アメリカ史概説』東京：東京大学出版会、1987年。

—— 「アメリカ『革新主義』論」、『社会科学ジャーナル』第6巻、国際基督教大学社会科学研究所、1965年。

●安藤次郎

—— 『アメリカ自由主義とニューディール：1940年代におけるリベラル派の分裂と再編』京都：法律文化社、1990年。

—— 「異端の副大統領ヘンリー・A・ウォーレス：ポスト冷戦時代の視点から」、『立命館国際研究』第19巻3号、2007年。

●安藤正一

—— 「アメリカに見るビッグ・ビジネスの史的発展：企業者活動を中心に」、『東京交通短期大学・研究紀要』、第13号、2009年、28頁。

●いいたもも

—— 『コミンテルン再考：第三インターナショナル史と植民地解放』東京：谷沢書房、1985年。

●池上嘉彦

—— 『記号論への招待』東京：岩波新書、1984年。

●池上裕子

—— 「世界美術史の見地から戦後アメリカ美術の台頭を考える」、『美術史論集』第10巻、神戸大学美術史研究会、2010年。

●伊藤俊治

—— 『写真史』東京：朝日出版社、1992年。

—— 『バリ島芸術をつくった男：ヴァルター・シュピースの魔術的人生』東京：平凡社新書、2002年。

●市野川容孝、宇城輝人編

—— 『社会的なるものために』京都：ナカニシヤ出版、2013年。

●井上謙治

—— 『社会批評の伝統』、『社会的批評・アメリカ古典文庫 20』国重純二・井上謙治訳、東京：研究社、1915年=1975年。

●今道友信

—— 『美について』東京：講談社現代新書、1973年。

●今村仁司

—— 『アルチュセールの思想：歴史と認識』東京：講談社学術文庫、1993年。

●飯山雅史

—— 『アメリカの宗教右派』東京：中公新書ラクレ、2008年。

●上野継義

—— 「アメリカ人事管理運動と『人間工学』の諸相(1)：人間工学ブームの盛衰」、『商學論集』第83巻4号、福島大学経済学会、2015年。

●上野千鶴子 編

—— 『構築主義とは何か』東京：勁草書房、2001年。

●上島春彦

—— 『レッドパーズ・ハリウッド：赤刈りに挑んだブラックリスト映画人列伝』東京：作品社、2006年。

●梅原峻

—— 『フランス人民戦線：統一の論理と倫理』東京：中公新書、1967年。

●江原武一

—— 「アメリカの学部教育の現状」、『立命館高等教育研究』6巻、2006年。

●遠藤泰生

—— 『アメリカの歴史と文化』東京：放送大学教育振興会、2008年。

●大和田俊之

—— 『アメリカ音楽史：ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』東京：講談社選書メチエ、2011年。

●大角欣矢

—— 「ハルモニアの語りを超えて：音楽学の成立と変遷をめぐる省察」、『東京藝術大学音楽学部紀要』第30号、2004年。

●奥田恵二

—— 『「アメリカ音楽」の誕生：社会・文化の変容の中で』東京：河出書房新社、2005年。

●尾鼻崇

—— 「映画音楽の誕生と変遷：マックス・スタイナーと西洋藝術音楽の大衆化を中心に」、博士論文、立命館大学、2008年。

●岡本仁宏

—— 「アメリカ革新主義研究の展開と共和主義」、関西学院大学『法と政治』第40巻1号、1989年。

●小川仁志

—— 『アメリカを動かす思想：プラグマティズム入門』東京：講談社現代新書、2012年。

●小田部胤久

—— 『西洋美学史』東京：東京大学出版会、2009年。

【か】

●加治屋建司

—— 「誤作動する武器：クレメント・グリーンバーグ、文化冷戦、グローバリゼーション」、『アメリカ研究』第37号、アメリカ学会、2003年。

●加藤幹郎

—— 『映画ジャンル論：ハリウッド的快樂のスタイル』東京：平凡社、1996年。

—— 『映画館と観客の文化史』東京：中公新書、2006年。

●加藤典洋

—— 『テキストから遠く離れて』東京：講談社、2004年。

●上山隆大

—— 『アカデミック・キャピタリズムを超えて：アメリカの大学と科学研究の現在』東京：NTT出版、2010年。

●亀井俊介

—— 『アメリカ文学史 [1・2・3]』東京：南雲堂、1997年。

—— 『サーカスが来た！』東京：平凡社、2013年（初版、東京：東京大学出版会、1976年）。

●柄谷行人

—— 『隠喩としての建築』東京：講談社、1983年。

●北村三子

—— 「1919年のデュイと日本」、『駒沢大学教育学研究論集』第26巻、2010年。

●菊地有恒

—— 『新版・楽典：音楽家を志す人のための』東京：音楽之友社、1979年、1989年。

●黒崎政男

—— 『哲学者はアンドロイドの夢を見たか：人工知能の哲学』東京：哲学書房、1987年。

●小泉元宏

—— 「『社会と関わる芸術 (Socially Engaged Art)』の展開：1990年代・2000年代の動向と、日本での活動を参照して」、博士論文、東京芸術大学、2011年。

●河野健二

—— 『ファシズムと社会主義』東京：TBSブリタニカ、1981年。

●国安洋

—— 『〈藝術〉の終焉』東京：春秋社、1991年。

●国本伊代

—— 『メキシコ革命』東京：山川出版、2008年。

●小林剛

—— 『アメリカン・リアリズムの系譜』、大阪：関西大学出版部、2014年。

●小檜山ルイ

—— 「産業社会の到来」、遠藤泰生『アメリカの歴史と文化』、東京：放送大学教育振興会、2008年、141～155頁。

【さ】

●佐伯啓思

—— 『自由と民主主義をもうやめる』東京：幻冬舎新書、2008年。

- 『イデオロギー／脱イデオロギー』 東京：岩波書店、1995年。
- 『西欧近代を問い直す：人間は進歩してきたのか』 東京：PHP文庫、2003年、2014年。
- 『20世紀とは何だったのか：西洋の没落とグローバリズム』 東京：PHP文庫、2004年、2015年。
- 佐々木健一
- 『美学辞典』 東京：東京大学出版会、1995年。
- 「藝術の価値原理：近世美学史の一断面」、『美學』第44巻2号、美学会、1993年。
- 「音楽の表意：渡辺裕氏の批判を駁す」、『研究』第2巻、東京大学文学部美学藝術学研究室、1984年。
- 佐竹由美
- 「アーロン・コーブランドの《エミリー・ディキンソンの12の詩》：『アメリカ的』なるもの考察と作曲分析」博士論文、東京藝術大学、2008年。
- 下宮忠雄、金子貞雄、家村陸夫編
- 『スタンダード英語語源辞典』 東京：大修館書店、1989年。
- 菅野弘久
- 「新音楽学の哲学：ローレンス・クレイマー」、『OTSUKA REVIEW』第33号、1997年。
- 杉浦康則
- 「群衆演出の観点から見たベルトルト・ブレヒトの理論とその実践」、『北海道言語文化研究』第12巻、2014年。
- 菅原教夫
- 『現代アートとは何か』 東京：丸善ライブラリー、1994年。
- 杉山恵子
- 「エレン・ゲイツ・スター：ハル・ハウスにおける製本制作の盛衰を中心に」、『恵泉女学園大学紀要』第26号、2014年。
- 【た】
- 高岡智子
- 「亡命ユダヤ人作曲家と映画音楽の成立史：初期ハリウッドから東ドイツへ」、博士論文、神戸大学、2008年。
- 高階秀爾 監修
- 『増補新装カラー版西洋美術史』 東京：美術出版社、2003年。
- 高橋章
- 「アメリカ『ニュー・レフト史学』」、『歴史評論』1978年9月号、校倉書房。
- 高橋悠治
- 『ロベルト・シューマン』 青土社、1978年。
- 高村峰生
- 「スティューグリッツ・サークルと機械の時代における『手』の表象」、『れにくさ』、第5-1号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部・現代文芸論研究室編、2014年。
- 竹田青嗣
- 『現代思想の冒険』 東京：ちくま学芸文庫、1987年、1992年。
- 『自分を知るための哲学入門』 東京：ちくまライブラリー、1990年。
- 田中勇
- 『国際社会の性質：国際政治研究の視座から』 東京：近代文藝社、1996年。
- 田中克彦

—— 『ソビエト・エトノス科学論：その動機と展開』 博士学位論文、一橋大学、2000年。

●田原牧

—— 『ネオコンとは何か：アメリカ新保守主義派の野望』 東京：世界書院、2003年。

●常松洋

—— 『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』 京都：昭和堂、2006年。

—— 『大衆消費社会の登場』 東京：山川出版社、1997年。

●富田虎男、鶴月裕典、佐藤円編著

—— 『アメリカの歴史を知るための62章、第2版』 東京：明石書店、2009年。

●富山太佳夫

—— 『ダーウィンの世紀末』 東京：青土社、2005年。

●丹治愛 編

—— 『批評理論』 東京：講談社選書メチエ、2003年。

【な】

●中島裕昭

—— 「ベンヤミンの『救出する批評』とブレヒトの『異化』」、『岐阜大学教養部研究報告』第26巻、1990年。

●中原佑介

—— 「文化と文明：マンフォードの芸術論」（特集・環境計画思想の原型を求めて・4）、『SD スペースデザイン』（1971年8月）、東京：鹿島出版社。

●長沼秀世

—— 「アメリカにおける人民戦線」『歴史評論』（1984年10月号）、東京：校倉書房。

●中谷義和

—— 「アメリカ革新主義期の国家像の模索：H・クローリー『アメリカ的生活の約束』の場合」、中央大学『中央大学論集』第7号、1986年3月。

●中野耕太郎

—— 『戦争のるつぼ：第一次世界大戦とアメリカニズム』 京都：人文書院、2013年。

—— 『20世紀アメリカ国民秩序の形成』 名古屋：名古屋大学出版会、2015年。

—— 「アメリカ『現代史』の起点を求めて」、『歴史評論』、東京：校倉書房。

—— 『『アメリカ史』叙述のグローバル化』、『パブリック・ヒストリー』第6号、2009年3月、大阪大学西洋史学会。

—— 「改革の時代とふたつの世界大戦」、有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎編『アメリカ史研究入門』 東京：山川出版社、2009年。

●仁井田千絵

—— 「アメリカ映画史におけるラジオの影響：異なるメディアの出会い」、博士論文、早稲田大学、2012年。

●野村達朗

—— 『ユダヤ移民のニューヨーク：移民の世界と労働の世界』 東京：山川出版社、1995年。

—— 「アメリカにおける『新労働史』の誕生の背景：『ニューレフト史学』とその受を中心に」、『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』 第19巻、2004年。

●紀平英作

—— 『アメリカ史はどのように描かれてきたか』、有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎編『アメリカ史研究入門』東京：山川出版社、2009年。

【は】

● 畑中佳樹

—— 『夢のあとで映画が始まる』東京：筑摩書房、1991年。

—— 「ハリウッド・システムと映画監督たち」、亀井俊介編『アメリカの文化：現代文明をつくった人たち』東京：弘文堂、1992年。

—— 「ブルースとヴァドゥーの悪魔」、飯野友幸編著『ブルースに囚われて：アメリカのルーツ音楽を探る』東京：信山社、2002年。

●蓮實重彦

—— 『映画はいかにして死ぬか：横断的映画史の試み』東京：フィルムアート社、1985年。

●橋爪大三郎

—— 『はじめての構造主義』東京：講談社現代新書、1988年。

●筈見有弘

—— 『ハリウッド・ビジネスの内幕：映像ソフト王国の全貌』東京：日本経済新聞社、1991年。

●早崎隆志

—— 『コロンゴルトとその時代：“現代”に翻弄された天才作曲家』東京：みすず書房、1998年。

●福中冬子

—— 「はじめに『ニュー・ミュージコロジー』とは何か：『ニュー・ミュージコロジー』再考に向けて」福中冬子編・訳『ニュー・ミュージコロジー：音楽作品を「読む」批評理論』東京：慶應義塾大学出版会、2013年、iii～xiv頁。

—— 「沈黙する〈聖人〉、抽象化された〈哀歌〉：〈文化的自由のための会議〉に見る、二〇世紀音楽における冷戦ポリティックスの射程」、『慶應義塾大学日吉紀要、人文科学』第23巻、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2008年、243～273頁。

●古矢旬

—— 『アメリカニズム：「普遍国家」のナショナリズム』東京：東京大学出版会、2002年。

●古矢旬、遠藤泰生編

—— 『新版アメリカ学入門』東京：南雲堂、2004年。

●本間長世 編

—— 『現代アメリカの出現』東京：東京大学出版会、1988年。

●本間長世

—— 「現代アメリカの政治と文化」、本間長世、亀井俊介、新川健三郎編『現代アメリカ像の再構築：政治と文化の現代史』東京：東京大学出版会、1990年。

【ま】

●前川玲子

—— 『アメリカ知識人とラディカル・ビジョンの崩壊』京都：京都大学学術出版会、2003年。

●牧野裕

—— 「アメリカ資本主義論の輪郭」『一橋研究』6巻3号、1981年、88～94頁。

●増田聡

—— 「音楽批評の解体文法・5 - なぜ音楽について語りたがるのか? : 音楽の倫理学に向けて」、『10+1 (No.30(2003)) 特集 都

市プロジェクト・スタディ』(2003年 No.30)、東京: INAX 出版、2003年。

●松本太郎

—— 「アーロン・コブランド」、『レコード音楽』(1952年1月号)、東京: 名曲堂出版部。

●丸山繁雄

—— 「(特集・ガーシュインとアメリカ文化) ガーシュインとジャズ、そして、ジャズとガーシュイン」、『音楽芸術』(1998年9月号)。

●三浦淳史

—— 「コブランド」、『音楽芸術』(1953年5月号)、東京: 音楽之友社、1953年。

●三浦信一郎

—— 『西洋音楽思想の近代: 西洋近代音楽思想の研究』東京: 三元社、2005年。

—— 「ベートーヴェン神話の形成と支配: 音楽における近代」、神林恒道、大田喬夫編『芸術における近代: 美的コンセンサスは得られるか(叢書/転換期のフィロソフィー・第2巻)』京都: ミネルヴァ書房、1999年、60~89頁。

●水島治郎

—— 『「尊厳ある生活」のために: ラテンアメリカにおけるポピュリズム』、『千葉大学法学論集』(第30巻3号)、2015年。

●三城大介

—— 「ジェーン・アダムスとハルハウスを訪ねて」、『地域社会研究』、別府大学地域社会研究センター、第17号、2009年。

●御園生涼子

—— 『映画と国民国家: 1930年代松竹メロドラマ映画』東京: 東京大学出版会、2012年。

●南弘明

—— 『十二音による対位法』東京: 音楽之友社、1998年。

●毛利嘉孝

—— 『増補・ポピュラー音楽と資本主義』東京: せりか書房、2012年。

●森孝一

—— 『宗教からよむ「アメリカ」』東京: 講談社選書メチエ、1996年。

【や】

●山口泰二

—— 『アメリカ美術と国吉康雄: 開拓者の軌跡』東京: 日本放送出版協会、2004年。

●柳生すみまる

—— 『映画音楽: その歴史と作曲家』東京: 芳賀書店、1985年。

●米村典子

—— 「リビジョニズム」、神林恒道、潮江宏三、島本澆編『芸術学ハンドブック』東京: 勁草書房、1989年、45~52頁。

【わ】

●若尾裕

—— 「監訳者あとがき」、マーティン・クレイトン、トレヴァー・ハーバート、リチャード・ミドルトン編『音楽のカルチュラル・スタディーズ』若尾裕監訳、東京: アルテスパブリッシング、2003年=2011年。

—— 『親のための新しい音楽の教科書』昭島: サボテン書房、2014年。

●渡辺和行

—— 『フランス人民戦線: 反ファシズム、反恐慌、文化革命』東京: 人文書院、2013年。

●渡辺裕

- 『西洋音楽演奏史序説：ベートーヴェンピアノ・ソナタの演奏史研究』 東京：春秋社、2001年。
- 『聴衆の誕生：ポスト・モダン時代の音楽文化』 東京：中公文庫、1989年、2012年。
- 『音楽機械劇場』 東京：新書館、1997年。
- 「音楽表現とメタファー：『この旋律は悲しい』の構造」、『美学』第143巻、1985年。
- 「芸術による世界認識：ネルソン・グッドマンの『表現（expression）の理論をめぐって』」、『研究』第3巻、東京大学文学部美学藝術学研究室、1985年。
- 「音楽における意図と意味」、『研究』第2巻、東京大学文学部美学藝術学研究室、1984年。

【事典等】

- 『岩波哲学・思想事典』 東京：岩波書店、1998年。
- 『社会学事典』 東京：弘文堂、1988年。
- 『ニューグローブ世界音楽大事典』 1980年=1995年。
- 『世界大百科事典』 東京：平凡社、2007年。
- 『ラールス哲学事典』 東京：弘文堂、1998年。
- 『最新文学批評用語辞典』 東京：研究社、1998年。
- 『広辞苑第五版』 東京：岩波書店、1998年。
- The Encyclopedia Americana. International Edition, 2002.*